

## 中国古代宗教研究の概要（１）

池澤 優

### はじめに

この文章は、最近までの中国の古代宗教についての研究にどのようなものがあり、どのような説があるかを紹介したものである。中国の古代宗教については、既に多くの論文が

発表されているが、不思議なことに、それらを要約し紹介したものはないようである。勿論、中国古代史の研究動向や文献目録は数多くあるし、また、例えば甲骨文の研究史のような本もあるのであるが、そのような研究の

中から、宗教学的なものを選んで、今まで中国古代宗教がどのようなイメージでとらえられてきたかを述べたものはないのである。これは私が常々不満に思ってきたことであり、ここに浅学の身をも顧みず、このようなものを発表するのも、中国古代宗教に関しても学説史のようなものが絶対に必要であると思うからである。そのように思う理由はいくつかある。第一に、古代宗教の復原という作業は研究者の古代宗教に対するイメージが投影され易い分野であり、従って、研究者がどのような全体的イメージの中で発言しているかを知ることは、個々の分野に於ける研究を吟味する際に重要だと思われる。第二に、後述するように中国古代宗教研究は研究対象・資料によっていくつかの分野に細分化されるように思われ、その全体像をとらえることは決して楽ではない。このような状況下では、個々の分野が中国古代宗教研究のどこに位置するかを確認する必要がある。第三に、大雑把に言うと、今までの中国古代宗教研究はそれ以外の宗教研究、例えばオリエントの古代宗教学とか、人類学・民俗学などの成果により打ち建てられた学説を導入することにより、進められてきた傾向がある。私としては中国古代宗教の研究によって得られた成果を宗教学の中へ持ちこむ方向へ進みたいと思うが、その場合でも、今までの研究がどのような宗教学説に依拠するのかは知る必要がある。

このような理由から、今までの研究史をまとめたようなものがあれば大変便利なのであるが、便利なのは私にとってであって、どうしても私自身のための研究メモの如きものになってしまった。個人のメモをこのような場所にのせるのは恐れ多いのだが、初めての経験ということでお許しをいただきたい。また、この文章の性質上、先輩諸先生方の見解を勝手に解釈して、あまつさえケチをもつけることもあると思うが、その点も見のがしていただきたい。

本論を書くに当って最も頭を悩ませたこと

は、どのような順序で述べるべきかということであった。トピックごとにまとめるのもおもしろそうであったが、結局、時代順に述べていき、その中で個々のトピックをまとめることにした。従って、最初は殷代ということになるが、その前に時代的な限定を超越し、中国古代宗教全体のイメージが表われているものを総論と題して冒頭に置き、殷代以前のものはここに含める。

## 総 論

中国古代宗教研究の範囲の広さと量の多さの割に、全体像を把握しようとする研究は多くはない。目ぼしいものを拾ってみると次のようなものがある。

1. 王治心『中國宗教思想大綱』1931年序 1980年版 台湾中華書局（富田鎮彦譯 稲津紀三修補『支那宗教思想史』昭和十五年）

これは極めて古いものであるが、一応、中国宗教の通史であり、その第一章第三節「中華民族宗教的起源」第二章「三代時的宗教思想」が古代宗教の部である。前者においてはトーテミズム、庶物及び群神崇拜、開闢神話、感性神話、巫覡と卜筮の五部に分けて論じている。どうやら、宗教発展の主な路線をトーテミズム・フェテシズムから諸神の崇拜へと考えたらしいが、神話がその中でどのような位置を占めるのかについては明文がない。あるいは、トーテミズム段階での、それを表わした思想が開闢・感生の神話とするのかもしれない。巫覡(シャマニズム)と占トを重視したのは大きな特徴で、これ以降の研究に影響を与えたようである。

群神崇拜の段階における神は、天神・地祇鬼(死者)・鬼(怪物)の四種に分類でき、天神の長は昊天上帝で、これは政治との関係が大きく、早くから天の祭祀は整えられた。祖先崇拜は、最初は功德のあった人の記念であったのが、後に血統によるものとなり、遂に祭天とならんで「中国古代の二神宗教、即

ち宗教的二元論となった。」ここに於いて興味深いのは、王氏は中国人研究者としてはめずらしく、祖先崇拜の欠点を指摘することである。どうやら至上神崇拜に重点を置く宗教観があったようであり、後の方でも上帝をユダヤ教の至上神と同じであるとしている。

言うまでもないことだが、王氏の研究は完全に文献に依拠し、それを信用している。従って夏朝の存在や周公の功績もそのまま信じているのであり、その点ではより古い研究と変わらない。しかし、中国人自身の手による宗教研究の先駆であり、トーテミズムの概念の導入、祭天と祭祖の併立の宗教観を提出した点などが興味深いのである。

## 2. 諸橋轍次『支那の家族制』1940年

『諸橋轍次著作集』第四卷所収 大修館

この書は宗教学的な研究ではなく、儒教文献に含まれている宗教的な事柄を解説したものである。だから、その中に特別の中国古代宗教のイメージが含まれているわけではなく、本来はここに置くべきではないかもしれない。しかし、伝統的な儒教的見地からの宗教研究をたいへんの手頃にまとめてあり、便利である。

## 3. 津田左右吉『上代支那人の宗教思想』

1919年 『満鮮地理歴史研究報告』第六号

津田氏の研究も古いものであるが、その方法は、古い文献中の宗教に関する記述を（それらは相互に矛盾していることが多い）人類学・民族学・宗教学の知見、現代の中国人の民間信仰と比較することにより、新旧を区別し、そこから宗教思想の変遷を跡づけていくものである。この方法は現在でも極めて有効であり、恐らく当時の研究者に与えた影響は少なくなかったと思われる。そして、研究の関心は、世界の未開民族・現在の民間信仰と一致する点を古層に属する古代の民間信仰、異なる点を中国人が独自に発達させたものとし、彼らの民族性がそこに表われていると考え、そこから中国人の民族性を抽出する点

にあるようである。

このように述べれば明らかのように、津田氏においては、諸民族に共通する民間信仰から民族独自の民族宗教へという発展の図式が前提とされているのであり、従って、前者をどのようなものにとらえるかが問題になってくる。その点は精霊の観念を基底とする（アニミズム）呪術的儀礼としてとらえられているようであるが、そのような像を描くに至った理由は明らかにされていない。精霊の中には人に害を与えるものだけではなく、そのような悪霊に対抗するため呪術儀礼の中で用いられる善霊や後に神に発展するものもあり、更に、後に祖先に発展する死者の靈魂もこの中に含まれていた。つまり、精霊は動植物・山川石木・天地など万物の中に宿っていたのだが、それらは人格的存在ではなかった。次第に人格化する存在ではあったが、中国の民間信仰の特徴は、それらが完全に人格化せず、山や川の普遍的な神を発生させなかったところにあった。人が生きることは、これら精霊の領分を犯すことであり、領分を犯された精霊は人間にタタリを下す。これを判断するのが巫祝であり、タタリを鎮めるために呪術的祭祀が行なわれる。津田氏の考えていた中国の古代宗教は、一言で言えば、潜在的に人間に敵対する精霊が充満していることを前提の観念とし、それを呪術により防禦するというものであった。これを基礎として、知識人の民族宗教が発生するのであるが、その後は両者が相互に影響を与えつつ展開していくのである。

津田氏の論のもう一つの特徴は、祖先崇拜が、上帝・郊社などと並んで、知識人の民族宗教の段階に入れられることである。民間宗教の段階には死者観念はあったが、祖先崇拜はなかった。勿論、死者の靈魂への恐れと同様に、近親者の霊をなつかしむ傾向もあったのであるが、他界観念が曖昧であり、結局、精霊と同様に現世に充満していたのである。これは死者がアニミズムの観念でとらえられていたとすべきであろう。それが家族制度の

成立に伴ない、近親者を懐しむ傾向がそれと結合して、直系父祖を祭る祖先崇拜ができたというわけである。

津田氏の研究は、この他、古籍に対する徹底的批判精神とか、先述した民族性の問題とか、参考になる点が少なくないが、宗教学的に見た場合、中国宗教の原初型態をアニミズムに求めた点が最も問題であり、研究家への影響も大きかった所だと思われる。

4. 小島祐馬『支那古代の祭祀』1941年  
『岩波講座・倫理学』15 『古代中国研究』に訂補して所収

後述するように、日本人による中国古代宗教の研究は、その原初型態を一元的に理解しようとする傾向が強いように思われ、前記の津田左右吉氏の論もアニミズムを全ての根源とするのであるが、小島氏の研究は祖先崇拜により一元的にとらえようとするものである。その点で日本人の古代宗教研究の代表であると言え、後の研究にも影響があったように思われる。

中国古代の神は、伝統的には天神・地祇・人鬼の三種に分けるが、一般的には王治心氏の如く、自然神と祖先神の二種に分けるのが普通である。小島氏も基本的には同様であるが、それらは全て「氏族の祖先神ないしは集団の守護神に起因する」。至上神である天帝も、もともと自然の天であったわけではなく、始祖やその前の遠い祖先を指したのであった。古代の部族社会では、その部族に幸福を与えるのは部族の長、または部族の先祖であり、それを部族の守護神として崇拜したのであったが、当時、ある星がある地方を支配するという星辰崇拜があり、そこから部族の祖先と星が結びつき、遂に天の崇拜となったのである。社も各集団の守護神であったのが、農業経済の確立に伴ない、土地穀物に対する信仰に結びつき、土神となったものである。

要約すれば、古代は部族併立の社会であり、その最大の宗教は部族長の祖先に対する崇拜であって、それが同時に部族の守護神であつ

た。それが一方では自然神となっていき、一方では祖先崇拜として普遍化するというわけである。ただ、祖先崇拜の根本的性格については、郭沫若の生殖器崇拜説を批判するだけで、詳しく述べられていない。しかし、始祖に対する崇拜を重視しているようである。小島氏の所論に対する批判は、星辰崇拜を古いものとした点に対するものなど多くあるが、詳しくは各論の中で扱うことになろう。

5. 加藤常賢『中国古代の宗教と思想』1954年  
ハーバード・燕京・同志社東方文化講座委員会 論文集『中国古代文化の研究』所収

これも古いものであり、加藤氏の研究は現在の流れの中では比較的重視されていないようだが、一定の影響力はあったようなので、ここで扱うことにする。また、氏の研究は『中國原始觀念の発達』『老子原義の研究』などを含んで始めて中国古代宗教に対する全体的展望を知り得るのであるが、私がいま深く分析していないので除外した。

加藤氏の研究を一言で蔽うとすれば、古代の民族宗教が後の思想に発展すると考え、その展開の軌跡を刻明に跡づけていったということになろう。その関心は前述した二書などにも貫かれている。そして、その展開の中心になったのが、民族宗教の聖職者であった巫覡=シャマンであり、しかも彼らは身体的不具者であったとするところに、その特徴がある。また、方法論としては、漢字の形・義・音から起源の意味を推測し、その背後にあったと思われる事実を「発掘する」方法をとる。この方法は比較的一般的なものであるが、加藤氏の場合、転声を重ねる所に特徴がある。

この論文では、最初に祭祀者集団の特殊性の解明から始まる。巫覡が句僕・侏儒として述べられている文献が多いことを根拠にして、「亞(=悪)」「仁(=任)」「南」などの字がそれを表わす字であり、当時、身体的な異常性が神聖視されたために、句僕などが神の言葉を伝えるシャーマンとして考えられ、

同時に政治の主宰者となっていたと想定する。このような社会状況の復元をした後で、祭られる対象として天神と人鬼の二者について考える。前者の原型は雷神であり、帝と呼ばれるものに他ならない。その生命が「天命」であって巫祝が神がかりにより伝えるものである。人鬼は祖先に当るが、字形から、人が死んだ後にそれを放置して、骨だけになると、頭蓋骨を廟に祭り、他は墓に葬るという習俗を考えている。後に頭蓋骨の代わりに頭を作り、巫祝がこれをかぶって死者の尸となり、更に後世、尸は死者の孫、木主へと変化していった。このように自然神崇拜・祖先崇拜のいずれにおいても句僕・侏儒のシャーマンが中心であったとされており、後世、この祭祀者集団から儒家が発生するというわけである。

加藤氏の見解には問題となる部分は極めて多いが、方法については池田末利氏が言われるように(『甲骨学』第十二號「加藤常賢氏を悼む」)、音転には危険性があるということがある。また、古代宗教におけるシャーマニズムの重要性は疑い得ないとしても、それが加藤氏の説の如くであるかどうかは疑問である。

#### 6. 陳夢家「殷虛卜辭綜」1956年 科学出版社

言うまでもなく、甲骨卜辞の概説として最高のものであり、その性質から殷代の章で扱われるべきものである。当然そこでも扱うが、陳氏の全体的な中国古代宗教観について一言述べておきたい。

本書の第十七章が「宗教」と題され、帝・その下神である帝史・日・雲・風・雨などの自然神、土や地方の地主神と岳・河などの土地神が扱われる。祖先については第十～十三章で扱われているが、祖先崇拜の性格が問題になっているのではない。何故「宗教」の章で祖先崇拜が論じられないのか、私には疑問である。

陳氏の説の特徴は、少なくとも殷代に関する限り、帝・自然神の崇拜と祖先崇拜は基本

的には別であるとしたことである。帝は至上神であったが、人格性が与えられず、殷王と系譜関係を持つようなことはない。しかし、既に祖先が帝に迎えられ、祖先を通じて上帝に願いを達するという観念はあった。このために、上帝の人格化と祖先の「神帝化」がおり、周の「天」の観念に発展し、帝を祖先とするに至るのである。自然神も人格を持たぬ存在だったのが、祭祀の上で人格化され、遂に先公として、王の遠い祖先に加えられた。ここで疑問なのは、何故帝や自然神を人格を持たぬ存在としたかである。祖先崇拜と自然神崇拜を二元論的にとらえるのは、先述した王氏、後述する張光直氏の例もあるから、中国人の普遍的な宗教観と言えるかも知れないが、前者を人格、後者を無人格として対立させる根拠は、本書による限り存在するようには思われない。

#### 7. 張光直「中國遠古時代儀式生活的若干資料」1960年『中央研究院民族學研究所集刊』第九期

新石器時代の宗教を考えたものであるが、筆者の中国古代宗教に対する全体的見通しをうかがうことができるので、簡単に載せておきたい。

仰韶期の彩陶には子安貝の紋様があり、これは女性性生殖器の象徴と思われる、だから、この時期には生殖器崇拜があり、これは祈年祭と結合していた可能性が強い。また土器に魚の紋様やシャーマンらしい人の紋様があり、これは呪術・巫術の存在を示すものである。以上から、仰韶期の宗教は十数戸から成る村を単位とし、村長や巫師が主宰して、全村の福祉を祈るものだったと思われる。これは広義の社祭であると言える。

龍山期には儀式用の陶器・鳥形器蓋・卜骨が出現するが、これは祭祀の重要性と始祖伝説の存在、一部の人に結びついた祭祀と巫師の存在を示している。また、男性性生殖器を表わす陶器が出土し、これは祖先崇拜の存在を明示している。「祖」字は男性性生殖器の象形

であり、その後の位牌だからである。ここから、この時期の宗教は村落中の個別の親族(集団)を単位とし、そこに発生の基礎を持つ権力者を中心とした祖先祭祀が重要であり、そこではその親族集団の繁栄と福祉が祈られ、団結を維持する機能があつたのである。

以上より、中国古代の祭祀は、生業と関係し、村落全体の福祉を祈る社祭と、個別の親族集団の団結と福祉を目的とする祖祭の二つの傾向があり、龍山期以降は両者は併存していくとするのである。

#### 8. 白川静『甲骨金文学論集』1974

朋友

『金文の世界』1971 平凡社

『甲骨文の世界』1972 平凡社

『漢字の世界』(二卷)1976 平凡社

『中国古代の文化』1979 講談社

『中国古代の民俗』1980 講談社

中国古代宗教について、白川氏ほど、これを宗教として追究している研究者はいないと言ってよかろう。その方法は、象形文字である漢字は形成された時代の思想を表わしていることを前提として、同じ構成要素を持つ字「群形象」の字どうしの関連を見ていくことにより、漢字が形成された時代(使われている時代ではない)の宗教を復元できるというものである。更に、日本の古代宗教や神道、民俗学の成果を援用し、中国古代宗教を生々しく復元することに成功した。白川氏の論じる範囲は極めて広く、私はまだその全てに通じていない。従って、これから述べるところは白川氏の体系の一部にすぎないことを断っておく。

白川氏の中国古代宗教観を一言で言うなら、アニミズムの世界から自然神・祖霊の世界へとすることができる。但し、その場合のアニミズムは多少変っていて、呪術中心のアニミズムである。世界の森羅万象に精霊が宿っているが、それは人間に危害を加えうるもので、獣・虫形をしていると考えられていた。これ

は呪霊とも呼び得るが、それは、これらの霊を用いて人に害を与えることもでき、同様の呪術を用いて害を除くこともできると考えられたからである。その呪術を用いるのがシャーマンであるが、その場合のシャーマニズムは広く精霊に対する働きかけ一般を指す。

このような世界観は、比較的長く残存し、殷代も基本的にはアニミズム的世界観の下にあった。祖先も卜辞から精霊的観念により把握されていたことがわかるが、それが周祭制度に示されるように、精霊と祖先、祭祀と呪術の間に区別が生じてくる。完全に祖霊の観念が成立するのは西周になってからであり、祖霊観念を中心にした社会は、氏族共同体を単位とし、各々の氏族の中心がその共同始祖であるような社会を考えていたらしい。但し、この変遷が具体的にどのような過程で進行したのかについては詳しく述べられていない。

それから、帝や自然神と精霊の関係については明文がないのであるが、自然神に関しては精霊と祖霊の間に位置し、先公になることで祖先化すると考えているようである。天神は上帝を中心に整然たる秩序を持ち、かなり人為的に整えられた段階としてとらえられているようでもある。ただ、このような個別の発展史はあまり表面化せず、アニミズム的世界観から祖霊的世界観への発展の図式が強調されている。

これは白川氏の基本的な方法論と関係するのであろう。字形から抽出できるのは、文字ができた時代の思想であって、それがそのまま表われる形で文字が使用されることは予想できないのであるから、それは一つの理念型(作業仮説)にならざるを得ない。そのことが認識されていれば問題はないが、白川氏の場合、その理念型がしばしば殷代の現実とされる傾向があると思う。

もう一つの問題は、中国古代宗教の原初形態を呪術とシャーマニズムを媒介にしたアニミズムとする根拠である。それはタタリを表わす「𪔐」「𪔑」などの獸形・虫形をした字から出発するのであるが、タタリをそのように

単純に解釈できるのであろうか。このことについては祖先崇拜の所で述べる機会があろう。

9. 赤塚忠『中国古代の宗教と文化——殷王朝の祭祀』1978 角川書店

本書の前半は、赤塚氏の甲骨卜辞中の祭祀対象についての研究をまとめたものである。ただ、私としては氏の体系がよく理解できないところがあるので、その点を含めて以下に述べることにする。

赤塚氏の究極の関心は、殷王朝が後の王朝に基礎となったとすれば、その形態・文化の中に後世に継承される特質があったはずだとして、それを宗教の中に発見しようとするのである。そして、殷王朝を殷王族を中心とした氏族の連合、殷代の宗教を上帝を至上神とする多神教と規定し、両者の関係から殷文化の特質を明らかにしようとするのである。殷代の神は、(イ)祖先神、(ロ)族神、(ハ)先公神、(ニ)巫先、(ホ)天神、(ヘ)上帝の六種に分類できるが、このうち(ロ)(ハ)(ニ)のとらえ方に赤塚氏の最大の特徴がある。即ち、これらの神はもともと氏族神であり、ある氏族を保護し、その氏族の聖地で祭られた。殷王朝成立以前には全ての氏族で同様であったが、それらが殷王朝の体制に組み込まれるに従い、あるものは河岳のように普遍化され、あるものは殷族と擬制的系譜関係が想定されて先公神となり、また、殷族より先に発達して巫術を持っていた氏族の神は巫先となった。ここで疑問なのは、このようにして多くの神を氏族神とすると、殷族固有の神は何なのかということである。上帝かとも思えるのだが、上帝は殷族の氏神であるとは言っていない。

上帝については、「帝」字は神霊が憑りつく木主を十字形に組み合わせたもので、個々の自然現象を支配する精霊に対し呪術儀礼を行って望むような結果を得ようとする巫術信仰から帝の信仰が発生したと言う。その残存した形が、帝が自然現象を支配しているように言う卜辞である。特に、帝が支配する自然現象が農耕を中心としているのは、農業を生

業の中心とする殷王朝ができたためであり、殷王朝は多くの氏族神を普遍化・先公化の形で統合するとともに、それらの神性を上帝に集中させ、そこにおいて、殷王国の支配という帝のもう一つの能力が生まれたのである。従って、上帝は殷王朝統一の中枢であり、自然界と人間界を統一的に支配する至上神となる。ここで疑問なのは、中国古代宗教の原初型態をアニミズムとシャーマニズムの結合した宗教に求めているようだが、精霊と氏族神の関係はどうなっているのかということである。

祖先崇拜は上帝崇拜の下で意味づけられる。つまり、祖先は上帝と王の仲介者である。帝と王の仲介者の役割は、最初は巫先にあったのだが、後には先公や祖先が等しく持つようになった。だから、先述した上帝=至上神の説はかなり具体的なイメージで考えられていたらしい。

このような上帝を重視する説の最大の困難は、上帝を直接の対象とする祭祀の卜辞がほとんどないことである。そこで何故そのような卜辞がないのかを説明し、上帝の祭祀を復原しなければならぬのであるが、この点の論証はかなり強引の印象をまぬがれ得ない。

赤塚氏の研究は、個々の神祇に対する分析や殷代の神々の関係については精密で、かなり役に立つ。しかし、宗教の時代的変遷を明言しないので、そのイメージはあまり明瞭になってこない。ここは、多分に私の勝手な読みこみであるが、シャーマニズム・アニミズム・呪術が結合していた原初的宗教から、氏族神を中心とする型態に発展し、更に殷代になって、上帝を中心とする国家宗教へ統合されるというようなイメージとしておく。

10. 伊藤道治『中国古代王朝の成立』1975 創文社

「殷以前の血縁組織と宗教」『東方学報』32 1962

伊藤氏は中国古代史の専門家であり、従って研究の方法も歴史学者らしく確実である。後者の論文で、住居跡から新石器時代の家族

制を復原し、そこから祖先崇拜を推測するところなど、その例である。また、赤塚忠氏から大きな影響を受けており、かつ、その不明瞭な部分をより確実に補っている。

伊藤氏は、中国古代宗教における祖先崇拜をかなり重視している。従って、以下の記述も祖先崇拜が中心になるかもしれない。先ず仰韶期には既に死後の観念があった。ただ、それは祖先崇拜ではなく、氏族共同体（あるいは、その下位集団）の「トーテム信仰の如き始祖神」と、かつての共同体成員全体の死霊を「一種の萬靈崇拜の如き形」で崇拜するものであり、個々の先祖の霊はあまり明確に意識されず、マナ信仰の中にとけこんでいた。

龍山期になると、住居跡に火の祭祀の跡があり、これは個々の家族が各自の祖先を祭る祖先崇拜が発生したことを示している。その中の有力な家の死者は次第にその氏族の「氏神」になっていき、そこに様々な精霊が集合され、自然神となっていった。従って、自然神も祖先から発生したのであり、「祖先神、特に男系の神が重視されたこと」を示すものである。

ただし、この時期の祖先神は後世の意味における祖先ではなく、まだ死霊の観念でとらえられていた。それは殷代の第一期に至っても同じであった。第一期卜辞に祖先が子孫にタタリを下す存在として表現されているのはこのことを示している。第二期になると計画的な周祭制度が行なわれるのは、祭祀により祖先のタタリを回避できるようになったことを示しており、これは祖先がより安定した存在になったことを示している。第三・四期には周祭の実施は不明であるが、祖先名の下に「日」字を加えて祭祀の日を表わしている例は、祖先が太陽と同一視され、現世と同じ明るい世界に住んでいることを表わし、祖先が祐助を与えている例もあって、完全な意味での祖先崇拜が成立していることがわかる。第五期には祖先は更に安定し、「神として確立」する。

これは祖先崇拜の発展史であるが、自然神

の方は次のようになろう。前述したように、氏族中の権力を持った家の祖先が氏族神に成長していく。これらは主に農耕にかかわるが、それに影響を与える自然現象をも支配するようになり、遂にその地方の全てを支配する至上神となっていった。これは殷代の帝に当るもので、殷王朝の統一以前には、各々の帝を載いた氏族が無数に存在していたのである。殷はそれらの氏族を併合していったわけだが、その関係は、統治者と被統治者の関係（もあったが）ではなく、殷の優越を認めた氏族連合であった。その過程で、殷による祭祀権の奪取が行なわれ、各々の神の個有の祀地で殷王朝が祭るようになった。当然、その神は殷の上帝の下に置かれ、その能力は上帝に集中させられた。このようにして、帝と自然神が多くの能力を共有するに至るのである。また、祖先崇拜の論理にもとづき、一部の氏族神は殷の先公に加えられた。更に、完全に殷が支配した地域の氏族神は、その能力のほとんどを奪われ、わずかに土地神「社」として残存した。

このように、伊藤氏は中国古代宗教を、同じ祖先の祭祀から発生した、祖先崇拜と自然神崇拜の二つに分ける。前者は氏族内部の「内向的」宗教であるのに対し、後者は「外向的」で、殷王朝氏族連合体の紐帯であり、多分に政治的なものだと言える。伊藤氏の所論についても若干の疑問があるが、祖先崇拜のところで述べることにしよう。

#### 11. 朱天順『中国古代宗教初探』1982 上海人民出版社

中国古代宗教の概説書として最も新しく、また中国人のものとしては始めてのものかもしれない。内容は非常に多岐に渡り、中国古代宗教のほぼ全分野をカバーする。また、大陸のものとしては珍しく（といっても最近は増えているが）特定の思想に影響されることが少なく、個々の分野について冷静に分析を重ねている。反面、中国古代宗教に対する統一のイメージはあまり浮かび上らず、従って、



ここに要約して示すことは困難である。また私も個々の内容について詳しく調べてないので、各論の部分で述べることになる。ここではその目次のみを示し、中国古代宗教の研究分野としてどのようなものがあるかを知ることができるとしたい。

#### 第1章 序論

#### 第2章 天上の諸神の発生と発展

- (1) 太陽神の神格化と拝日祭祀
- (2) 月神と星官
- (3) 気象の神々

#### 第3章 地上の自然神の崇拜とその変化

- (1) 地神崇拜の発生と変化
- (2) 神山の信仰と山神
- (3) 河川の神
- (4) 植物崇拜と農業神

#### 第4章 動物神とトーテム崇拜

- (1) 動物の神格化
- (2) トーテム崇拜

#### 第五章 前兆の迷信と古代の占ト

- (1) 原始時代の前兆の信仰の発生原因
- (2) 生物を前兆の印とする信仰

- (3) 夢兆の信仰と夢占

- (4) 天文・気象・山河の変化を前兆とする信仰

- (5) いくつかの古代の占トの起源

- (6) 殷代のト甲ト骨の起源と発展

- (7) 『周易』源流浅探

#### 第六章 鬼魂崇拜と祖先崇拜

- (1) 死者崇拜
- (2) 古代の葬礼と葬礼
- (3) 祖先崇拜

#### 第七章 中国古神譜

#### 第八章 天帝と天命

- (1) 殷代の上帝崇拜
- (2) 西周以降の上帝崇拜と天命の信仰
- (3) 上帝崇拜と祭礼の変化

#### 第九章 中国古代宗教の社会的機能

- (1) 殷代の宗教の社会的機能
- (2) 宗教は西周の社会制度を維持する上でどんな機能をはたしたか
- (3) 戦争と経済における宗教の機能影響
- (4) いくつかの古代宗教観
- (5) 重民輕神と無神論的宗教観